



# 四国ディスカバリー

～土佐和紙の伝統を受け継ぐ、不織布の抄造企業にお話をお聞きしました～

～ものづくりの原点からオンリーワンへ～

土佐和紙の歴史は平安時代から現在まで1,000年以上の歴史があります。その歴史の中で「土佐紙業界の恩人」といわれた吉井源太（1826年-1908年、現いの町出身）は、明治維新後の紙の需要拡大を見込み、量産と品質向上に取り組んだ結果、より薄くより強い紙を開発し、国内のみならず欧米に輸出されるほどのヒット商品を生み出しました。また、これらの技術を全国の紙業者へ指導・伝授すると共に、海外への販路拡大を行うなど、現在の製紙技術の発展に大きく寄与したと言われています。

その土佐和紙の伝統や偉人の功績を受け継ぎ、この地において脈々と受け継がれてきている「和紙」の技術、またそれらの技術を活かし開発された「不織布」の抄造（※）技術や商品開発について、三和製紙株式会社 代表取締役社長 森澤正博氏にお話をお伺いしました。



名称	三和製紙株式会社
所在地	高知県土佐市高岡町丙 443-1
設立	1962年（昭和37年）
代表者	森澤 正博（代表取締役社長）
従業員	118名
資本金	30百万円
HP	<a href="http://sanwaseishi.co.jp">http://sanwaseishi.co.jp</a>

## ●御社の歴史についてお聞かせください。



三和製紙株式会社  
森澤 正博 代表取締役社長

障子紙からはじまり、ティッシュ、不織布と、さまざまな種類の「紙」を機械抄きで製造してきました。

昭和40年代にアメリカからティッシュが日本にやってきたことをきっかけに、高知県でも多くの製紙会社がティッシュペーパーの抄造を始め、全国的にシェアを高めました。みなさんがよく目にするポケットティッシュも、実は最初に作ったのは高知県なのです。大手企業が参入してきたことで、県内での抄造は減っていき、当社も昭和62年にティッシュペーパー抄造は中止しましたが、昭和56年より不織布の抄造を始め、平成に入った頃から不織布を加工したウェットティッシュやフェイスマスクが売上げを伸ばしていきました。今では製品の8割が不織布、2割が和紙となっていますが、伝統ある和紙も、食品用の包材や障子紙として、引き続き抄造しています。

※抄造とは、紙の原料をすいて、紙を製造すること。



当社が抄造した和紙や不織布などの原紙は、グループ会社である三昭紙業（株）などで加工・商品化され、有名化粧品メーカーのOEMや自社ブランドとして販売されています。

また、「原紙から商品までを一貫生産したい」という会長（創業者である森澤豊明氏）の思いから、平成18年には農業法人（株）クリーンアグリを設立し、紙の原料となる「楮」の自家生産を始めたほか、平成24年には（株）三彩を設立し、「楮」を原紙に使用した自社ブランド商品の企画、開発及び販売を始めました。

### ●伝統を守りつつ、新しい技術を生み出し続けている秘訣についてお聞かせください。

和紙は、水の中で繊維をほぐして網ですくいあげたものです。不織布は、繊維を織らずに絡み合わせたもので、和紙と同じように繊維の特徴を活かしたものです。当社が抄造する不織布は、パルプをレーヨンで挟む三層構造となっており、ウォータージェット水で繊維を絡ませるспанレース製法を採用しています。パルプは水をよく吸いますが、繊維が短く抜けやすいため、繊維が長いレーヨンで挟むことでパルプの繊維の抜けを抑え、「保水性があり、強度が強く、かつ肌ざわりが良い」ものになります。この技術は、フェイスマスクや紙おむつ等の商品に使われています。



三和製紙の商品の数々

また、ポケットティッシュを製造していたときの紙を折りたたみ、包装する技術がウェットティッシュやフェイスマスク等の製造で活かされています。

このように、伝統や経験から生まれた技術を組み合わせることによって、新しい商品を生み出しています。

### ●地域貢献の取り組みについてお聞かせください。



私が会長を務めている（一社）高知県製紙工業会の活動として、年に1回、仁淀川上流の山で植樹を行っています。紙を製造するうえで大量の水を使用するため、山を保全し、水量・水質の保持を目指しています。

また、地元土佐市の夏の一大イベントである「土佐市大綱まつり」では、不織布を使って編み上げられた大きな綱で大綱引きを行うのですが、他の地元製紙会社と共同で、この綱の不織布の提供も行っています。

工場で使用する、仁淀川水系地下水を貯水しているタンク！

かなり大きいです！

1日で5,000トンの水を利用しているそうです。



## ●女性の活躍についてお聞かせください。

当社の職員の男女比は半々くらいですが、仕上げの検品作業はほとんど女性職員が行っています。検品作業は右の写真のように、機械が製造した紙を目で見て検査するという非常に細かい作業です。男性ができないことはないのですが、女性のほうがよく気が付き、丁寧だと感じています。

小さいお子さんがいる女性職員も多いので、育児休暇をとりやすい環境を心掛けています。最近では、男性の育児休暇の例も見られます。



検品をする女性職員の方々



「りぐる」のフェイスマスク

★「りぐる」とは土佐弁で、念を入れる、凝るという意

## ●社長が大切にされていることはなんですか？

紙は機械で抄造していますが、同じ機械を使ったからといって、どこでも同じ製品ができるわけではありません。紙は技術の組み合わせによって色々なものができる可能性があります。どんなものができるかは工夫の仕方で大きく変わり、この「工夫」には人が大きく関わっています。フェイスマスクも、「こんなものできないか」という話から、職員が今までの技術を組み合わせ、改良を重ねてできたものです。

高知県には多くの製紙会社がありますが、それぞれが違う技術と特徴を持っており、同じ製紙会社でも作り出すものは違います。「他とは違うなにか」を作らなければ、お客さんもこちらを向いてくれません。そしてそのためには、人の工夫が欠かせません。

だから、会社にとって1番大切なものは人だと思います。「人をいかに育てるか」が重要だと思いますし、職員にとって仕事をやっていて意義のある、生きがいを感じる会社にならなければならないと思っています。



### <取材後記>

「紙が主役になることはほとんどありませんが、それは決して悪いことではなく、単体で主役にならないからこそいろいろな使い方があり、身の回りに溢れる欠かせないものになるのです。」という社長の言葉のとおり、三和製紙の商品には普段から目にする商品がたくさんありました。紙は地元の基幹産業であるだけに高知県には多くの製紙会社が存在しますが、「他とは違うなにか」を作り出すために、今までの技術を組み合わせるといのは、長年受け継がれている伝統産業ならではのと思いました。

インタビュー後の工場見学では社長自ら案内・説明をしていただきました。工場で作業している職員の方が社長と和やかに談笑する姿を見て、「人が大切」と仰っていた社長の職員に対する信頼を感じました。検品作業や㈱三彩などで女性職員が活躍されていることも、社長の女性職員に対する信頼があってこそだと思います。

自社ブランド商品である「りぐる」のフェイスマスクを私も使用しましたが、マスクが厚めで、肌ざわり・顔への張り付きもよく、お肌がプルプルになりました。高知のお茶の香りが染み込んだ汗拭きシートや、7月からはよさこい祭りの豆知識等が印刷されたフェイスマスクも販売されるそうなので、高知へ観光にきた際のお土産に、こじゃんとえいがやないでしょうか！

(高知財務事務所管財課 高瀬 朝代)

掲載している情報は、平成30年6月時点のものです。

掲載している写真は、同社よりご提供いただきました。